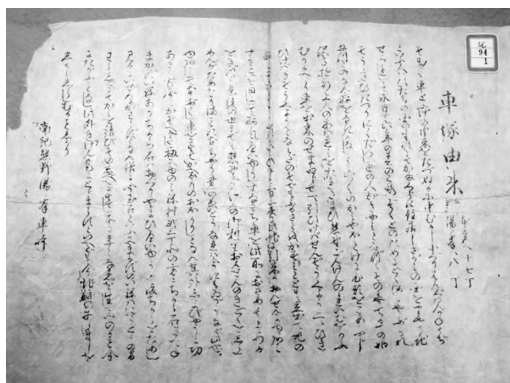


# 和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵『車塚由来』 解題

和歌浦プロジェクト 石 本 和可奈

## 序

本稿の課題は、和歌山大学紀州経済史文化史研究所（以下、紀州研）所蔵の『車塚由来』について、史料学上の基礎的な検討を行うことである。和歌山県田辺市本宮町湯峯付近には、『車塚由来』に登場する「車塚」、「力石」、「まかずの稲」など「小栗判官史跡」が現在でも残っている。<sup>(一)</sup>『車塚由来』は、小栗判官伝承を考える上で重要な手掛かりになる史料と考える。まず、版本墨刷一紙の全文を翻刻し、史料の状態について触れておく。



『車塚由来』（紀州研蔵）

## 第一章 『車塚由来』の紹介

【翻刻】

車塚由来

本宮へ十七丁  
湯ノ峯へ八丁

そもく車とふげの由来をたづぬるに中むかし小ぐりはんぐはんかねうち  
といふ人はひたちの国の生れにてかまくらに住居しさがみの国をりやう地  
せられしに永享六年の春のころぞくとのためにどく酒にやぶられ

そう身ひきつりにくだりし世の人がきやみとなづくその妾てゐるの姫  
おつとのなん病をなきかなしみ山々のかみやほとけに心願をこめふじ

沢寺遊行上人のあはれみをたれたまひ熊野ごんけんのれいむをかふ

むり夫□に車を出来のせまゐらせ一と引ひけばせんぞうくよう二とひき

ひけば万ぞうくようとなみだのそでもふるさとをかすみとともに立出て紀の  
路におもむきうみ山川もいとひなく三日三夜に此地に引来はおんせんにゆあみ  
するを一七日にして病氣へいゆうしすなわち車を此所におさめ其上につか

をきづく是後の世までも熊野ごんげんの御利生おんせんのきどくをしらし

めんがためなりまさに本ちやう第一のめいとうなれは今にもゐざりなど此也

ゆあみして本ぶくし車をすてかへるものおほかりしとなん其外しよびやうに功  
あるを古今にかぞへがたし扱又ゆのみね村二三丁北の方にちから石并たね

まかずいねありちから石はおぐりやまひへいゆうの後ちからをためし

みるにいぜんにかかわらずとなん俗に今玉石といふ又まかずのいねはにうとうの間

わらしべにてかみを結びそのしべをすてし所に年々なえを生しみのるを今

にたがふをなし此外きげん是にとゝまらずといへども今此跡のあらましを

しるしらしむるをしけり

南紀熊野湯ノ峯車峠

【漢字を充てた読み下し文】

車塚由来 本宮へ十七丁湯の峯へ八丁

そもそも車峠の由来を尋ぬるに中、昔小栗判官兼氏といふ人は常陸国の生れにて、鎌倉に住居し、相模国を領地せられしに、永享六年の春の頃、賊徒のために毒酒に破られ、総身引き攣りにくだりし、世の人餓鬼病と名付く。

その妾照手の姫、夫の難病を泣き悲しみ、山々の神や仏に心願をこめ、藤沢寺遊行上人の憐れみを垂れ給ひ、熊野権現の霊夢を蒙り、夫□に車を出来乗せ参らせ、「一と引引けば千僧供養、一と引き引けば万僧供養」と涙の袖も故郷を霞と共に立出て、紀の路に赴き、海山川も厭ひ無く、三日三夜に此地に引来は、温泉に湯浴みするを一日にして病氣平癒し、即ち車を此所に納め、其上に塚を築く。

是後の世までも熊野権現の御利生、温泉の奇特を知らしめんがためなり。まさに本朝第一の名湯なれば、今にもるぎりなど此也。湯浴みして本復し、車を捨て帰る者多かりしとなん、其外諸病に功あるを、古今に数え難し。

扱又湯の峯村二三四北の方に、力石并種まかず稲あり。力石は小栗病平癒の後力を試しみるに、以前に変わらずとなん、俗に今玉石といふ。

又まかずの稲は入湯の間、藁しべにて髪を結び、そのしべを捨てし所に、年々苗を生し実るを今に違ふをなし。

此外起源是に留まらずといへども、今此跡のあらましを記し知らしむるをしけり。

# 南紀熊野湯ノ峯車峠

## 【内容の要約】

昔、常陸国出身の小栗判官兼氏なる人物がおり、相模国を領地として、鎌倉に住んでいた。ところが、永享六年（一四三四）の春の頃、賊徒によって毒酒を飲まされたことで体中が引き攣ってしまい、その有様は世の人に餓鬼病と名付けられた。小栗の妾であった照手は夫の難病を泣き悲しんで、山々の神や仏に祈り、藤沢寺の遊行上人の情けをかけられ、熊野権現の霊夢を見る。照手は夫の小栗を車に乗せ、「一引き引けば千僧供養、二引き引けば万僧供養」と車を引いて紀伊国へ向かう。

三日三夜で本宮湯の峯温泉に辿り着き、温泉で一七日湯浴みした所、小栗の病気が治った。小栗が乗って来た車を埋めた所には、後の世まで熊野権現の御利益と、温泉の不思議な力を示すための塚（車塚）がつくられた。湯の峯温泉は本朝第一の名湯で、諸病に効果があり、湯浴みをして病気を治し、車を捨てて帰るものが多かった。また、湯の峯村から二、三丁（二二〇から三三〇メートル）の所には、小栗が快復した後で力を試した力石（玉石）、小栗が湯浴みの際、髪を結ぶために使っていた藁を捨てた所に、毎年稲が実るようになったまかずの稲がある。『車塚由来』はこれらの史跡のあらましを記し、知らしめるものである。

本文の行数は一九行、一行あたりの字数は三一字前後で、紙の左上部分が破れて欠損している。また裏面左上には「永田」の印が逆さに捺されているが、『車塚由来』が紀州研へ収蔵される経緯は記録が無く不明ということもあり、史料とどのように関わった人物なのかは不明である。

## 第二章 『車塚由来』の諸本について

『車塚由来』を所蔵している紀州研以外の施設に、東京都の三康文化研究所附属三康図書館（以下、三康図書館）と、愛知県の西尾市立図書館岩瀬文庫（以下、西尾市岩瀬文庫）がある。

三康図書館の『車塚由来』は紀州研所蔵のものと行数、一行あたりの字数が同じで、また字の細部まで類似していることから、同版のものであろう。前後関係については、紀州研所蔵のものの方が字の擦れが酷いことから、三康図書館所蔵のものが早印、紀州研所蔵のものが後印と考えられる。

紀州研所蔵の『車塚由来』との違いは、紙面に「大橋図書館印」、「安田家寄附特別図書」、「昭和三、一一、七」の判が入っていることである。大橋図書館は大正一二年（一九二三）の関東大震災の際に建物と蔵書を焼失してしまった、三康図書館の前身である。震災後、大橋図書館と交流のあった二代目安田善次郎（安田財閥の祖、安田善次郎の息子）が貴重図書の購入費として、五年間毎年一万円を図書館へ寄付したのだが、この寄付金で購入された図書に捺印されたのが「安田家寄附特別図書」の印である。<sup>(二)</sup>

「昭和三、一一、七」は購入された年月日で、三康図書館の昭和三年度特別図書購入簿には、昭和三年（一九二八）一月七日に水谷書店から購入したという記録が残されている。しかし、水谷書店がいつ、どこにあった書店かは不明で、昭和三年以前の三康図書館所蔵の『車塚由来』の所在を辿ることはできない。

次に西尾市岩瀬文庫の『車塚由来』についてであるが、紀州研、三康図書館のものと異なり、『縁起集』という合冊資料のうちの一丁として綴じられていたものである。本文は二十行、一行あたりの字数は紀州研所蔵のものと同様である。最初の一九行の内容は紀州研所蔵のものと同じだが、最後に「依てこの塚へもうでる人は一□<sup>す</sup>代あしのわづらひする事なし」という車塚の御利益を示す一文が加わっているため、行数は一行増える形になっている。

また、紀州研、三康図書館のものの奥書が「南紀熊野湯ノ峯車峠」であるのに対して、西尾市岩瀬文庫のものは「南紀熊野本宮車峠 湯本屋栄七」となっている他、本文中も字が違ったり、字の細部が異なったりする箇所も多い。そのため、紀州研、三康図書館の『車塚由来』と、西尾市岩瀬文庫の『車塚由来』は異版のものと考えられる。しかし、前後関係までは分からない。

西尾市岩瀬文庫は明治四一年（一九〇八）に岩瀬弥助（実業家で、西尾鉄道の初代社長）が全国 of 古美術商、古書店をまわって収集した資料を公開するために創設した施設である。「車塚由来」を含む『縁起集』は弥助が収集した資料の一つなのだが、弥助がいつ、どこで購入したものなのかは不明である。また、『縁起集』は『車塚由来』のような資料を多数綴じて合冊にしたものだが、合冊にした者に関する情報は記載されていないため、いつ、誰の手によって合冊されたのかも不明である。

以上のことから、『車塚由来』は明治、大正期の時点で既に存在し、収集されたことは確かである。しかし、それより以前の所在を探ることはできない。また、いつ作成されたものなのかも、史料上を見ただけでは不明である。次章では、『車塚由来』の本文の内容を検討することで典拠史料を類推し、作成された時期と特徴を明らかにしたい。

### 第三章 『車塚由来』と小栗物語・地誌類の内容校合

本章では『車塚由来』の内容を、小栗の物語としての部分、史跡のあらましに関係する部分に分けて、これまで見てきた小栗の物語や和歌山の地誌類と比較して、何に類似しているか考察していくことで、車塚由来の成立年代を比定したい。

比較検討の対象とした小栗物語および地誌は以下の通りである（カッコ内は本文中で引用する際の略称。なおこれ

らの書誌については別稿で検討した<sup>(1)</sup>。

軍記『鎌倉大草紙』（『大草紙』） 一四七九成立

説経節『小栗判官』（説経『小栗』） 一六四五～一六五七成立

御物絵巻『をくり』 一六二四成立

浄瑠璃『当流小栗判官』（『当流小栗』） 一六九八初演

仮作軍記『小栗実記』（『実記』） 一七三五刊行

浄瑠璃『小栗判官車街道』（『車街道』） 一七三八

縁起『小栗畧縁起』（『畧縁起』） 一八〇四成立

読本『小栗外伝』（『外伝』） 一八一三成立

地誌『熊野巡覧記』（『巡覧記』） 一七九四成立

地誌『西国三十三所名所図会』（『名所図会』） 一八五三成立

地誌『紀伊統風土記』（以下、『統風土記』） 一八三九完成

## （二） 小栗判官物語についての記述内容比較

『車塚由来』における小栗は、小栗判官兼氏という名で、常陸国に生まれ、相模国を領地とした人物とされている。名前が兼氏である小栗の物語は『当流小栗』と『車街道』のみである。小栗が常陸国生まれであるのは、小栗の父が常陸国の人物であるとされる『大草紙』、『実記』、『畧縁起』、『外伝』と共通していると考えられる。また、相模国については小栗が領地としている物語は無く、強いて言うならば義父（妻である照手の父）が相模国の押領使

や領主をしていた『当流小栗』や、『車街道』、『外伝』と類似していると言えるだろう。

『車塚由来』の小栗は「賊徒」に毒酒を飲まされて病になり、「餓鬼病」と呼ばれるようになる。毒酒を小栗に飲ませたのは、『大草紙』では強盗であった。『実記』や『畧縁起』でも盗賊ではあったが、これらの盗賊には「横山」という名称がついている。また、小栗が物語の中で病になったのは『実記』と『外伝』のみであるが、『実記』では病の原因は馬の血肉を啜ったことであり、『外伝』での病の原因は怨霊のせいで毒湯に落ちたことである。「餓鬼病」という名称については『実記』、『車街道』、『外伝』で見ることが出来る。

『車塚由来』における照手は小栗の「妾」であるとされている。つまり、小栗に照手以外の女性がいるということになるが、共通するのは、物語序盤で妻を娶っては追い出していた説経『小栗』、照手以前に娥という女性と子どもをもっていた『実記』、万の長の娘花兒に婿入りした『外伝』の三つと言えよう。

『車塚由来』には、藤沢の上人が、「熊野権現の霊夢を蒙る」という記述があり、また車を引く際に「一と引引けば千僧供養、二と引き引けば万僧供養」という言葉が登場する。藤沢の上人が霊夢を見る、という描写があるのは『当流小栗』、『車街道』、『外伝』である。しかし、熊野権現によるものは『車街道』の霊夢のみである。「一と引引けば千僧供養、二と引き引けば万僧供養」という言い回しについては説経『小栗』、『当流小栗』、『車街道』、『外伝』と、多くの物語に類似した記述を見ることが出来る。

「涙の袖も故郷を霞と共に立出」という記述から、『車塚由来』では照手が車を引いて来たと考えられる。照手が熊野まで来るのは『実記』、『車街道』、『外伝』のみである。

『車塚由来』で小栗が湯浴みをした日数は「一七日」である。同様の日数が記述されているのは『当流小栗』、『実記』、『車街道』である。ただし、『当流小栗』については小栗は熊野へ行かず、熊野から汲んできた温泉で一七日沐浴したことになる。



## (二) 小栗関係史跡に関する記述内容比較

次に、史跡と関係する記述について見ていく。『車塚由来』を見ると「車塚」の名称が記載されている。この名称が見られるのは『続風土記』と『名所図会』のみである。また、『車塚由来』では「車塚」は車を納めて、その上に塚を築いた所となっている。同様の記述が見られるのは『名所図会』のみである。『実記』の車に関する古跡や、『巡覧記』の車捨坂、『続風土記』の車塚は、車を捨てた所となっているため、同じ車に関する史跡ではあるが、あらましが少し異なっているといえる。

『車塚由来』の「車峠」という名称についてであるが、同様の名称は『車街道』と『名所図会』にのみ記述が見られる。

湯の峯温泉について、『車塚由来』では「本朝第一の名湯」「諸病に功ある」としている。湯の峯温泉については、説経『小栗』では「薬の湯」、『実記』では「いかなる難病も此湯に浴すれば、健に平復する」、『車街道』では「良薬も及ばぬ人の病を治す」、『外伝』では「名誉の薬湯」と称されている。また、『巡覧記』や『続風土記』では温泉の効能が列挙されている。

「力石」について、『車塚由来』では湯の峯村からの距離とその伝承を記述している。「力石」に関係する記述は、『実記』にもあるが、「力石」という名称が初めて見られるようになるのは『名所図会』になってからである。また、「まかずの稲」については、『車塚由来』以外だと『名所図会』にしか記述がない。

## (三) 『車塚由来』の記述内容についての小括

これまで『車塚由来』の小栗の物語と、史跡に関する部分を見てきた。その結果を表1「『車塚由来』内容比較表」にまとめた。

小栗の物語としての部分については、比較するポイントによって類似する資料が変わる上に、ポイント一ヶ所に

つき類似する資料が複数ある等、どの物語に最も似ているとは一概には言うことはできない結果となった。強いて言うならば、「比較表」で最も『車塚由来』と共通点の多かった『車街道』をベースとして、『車街道』とは共通しない小栗の出身や、名前の無い賊徒といった設定を、『大草紙』から補ったと見ることができるようになる。

また、史跡に関する部分については、「比較表」で最も共通点の多かった資料は『名所図会』となった。温泉の効能については『車塚由来』で「諸病に功ある」としているので、温泉の効能を列挙している『巡覧記』や『続風土記』の間、寛政六年から天保一〇年

表 1 『車塚由来』 内容比較表

『車塚由来』における記述		鎌倉大草紙	説経節「小栗判官」	『当流小栗判官』	『小栗実記』	『小栗判官車街道』	『小栗岩縁起』	『小栗外伝』	『龍野巡覧記』	『紀伊続風土記』	『西国三十三所名所図会』
小栗の物語としての部分	小栗の名が兼氏である	×	×	○	×	○	×	×			
	小栗は常陸国の生まれである	△1	×	×	△1	×	△1	×			
	小栗は相模国を領地とした	×	△2	×	×	△2	×	△2			
	小栗は賊徒に毒酒を飲まされた	○	×	×	△3	×	△3	×			
	毒によって小栗は病になった	×	△死	△死	△4	△5	△死	△4			
	餓鬼病という名称が記載	×	△6	△6	○	○	×	○			
	照手が妾である	×	○	×	○	○	×	○			
	「熊野権現の霊夢を蒙る」記載	×	△7	△7	△照	○	×	△7			
	「一引き引けば千僧供養」記載	×	○	○	×	○	×	○			
	照手が熊野へ来る	×	×	×	○	○	×	○			
	一七日湯浴みをする	×	△8	△8	○	○	×	△8			
	○の項目の数	1	1	2	4	7	0	4			
	△の項目の数	1	5	4	4	2	2	4			
	○と△の項目の合計数	2	6	6	8	9	2	8			
史跡に関する部分	車塚の名称が記載されている	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○
	小栗は乗って来た車を埋めた	×	△9	×	△9	×	×	×	△9	△9	○
	車峠の名称が記載されている	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○
	温泉の効能が記されている	×	△10	×	○	○	×	△10	○	○	×
	力石についての記述がある	×	×	×	△11	×	×	×	×	×	○
	まかすの稲についての記載	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○
	○の項目の数	0	0	0	1	2	0	0	1	1	5
	△の項目の数	0	2	0	2	0	0	1	1	1	0
	○と△の項目の合計数	0	0	0	3	2	0	1	2	2	5

△1：小栗の父が常陸国の人、△2：小栗の義父（照手の父）が相模国押領使や領主、△3：盗賊に横山という名前がついている、△死：毒酒によって小栗死亡、△4：毒酒とは異なる理由で小栗が病になる、△5：小栗とは別人が毒酒で瀕死になる、△6：餓鬼阿弥、餓鬼とする、△7：霊夢の内容が閻魔、観音である、△照：熊野権現の霊夢を照手が見る、△8：日数が異なる、『実記』は湯治ではなく沐浴、△9：車を埋めたのではなく捨てた、△10：薬の湯、名譽の薬湯と称しているが効能について記載なし、△11：「力石」という名称は使われていないが史跡の記述あり。

(一七九四から一八三九)であることを明らかにした。『車塚由来』にも「車塚」という名称が記載されているので、『車塚由来』の成立は寛政六年以降になるとみることができる。

#### 第四章 『車塚由来』の考察

##### (二) 『車塚由来』作者考

紀州研所蔵のものには欠けているが、西尾市岩瀬文庫所蔵の『車塚由来』の奥書には「湯本屋栄七」なる作成者と思しき人物の名が記されている。『車塚由来』は湯の峯の「小栗判官史跡」の紹介に特化した内容である。また、現在湯の峯の温泉には「○○屋」という名の温泉宿が多いこと、『車街道』で湯の峯温泉の紹介をする「葭屋安左衛門」という人物がおり、近世から温泉宿が「○○屋」と名乗っていた可能性のあることから、「湯本屋栄七」はかつて湯の峯温泉にあった温泉宿の主人と推測する。

しかし、「湯本屋栄七」という人物の名のある資料は『車塚由来』以外見つからない。また、現在湯の峯で温泉宿を営んでいる安井理夫氏にお尋ねした所、「湯本屋」という名の温泉宿は聞いたことが無いとのことだった。安井氏は昭和初期に湯の峯で生まれ育ち、父の代から湯の峯に伝わる小栗判官の伝承について調べ、当時ルーツの分からなかった湯の峯の小栗判官伝承を、全国的に有名な小栗の物語の一端であることを位置づけた方である。

「小栗判官史跡」と関わりの深い『車塚由来』を発行していた「湯本屋」が、大正期にまだ存在していたならば、小栗判官に関心を寄せていた安井氏の父が知っていて、安井氏に伝わっていたであろう。「湯本屋」は遅く見ても大正期より以前に存在した温泉宿であると推測する。

ところで、「湯本」という言葉は『実記』と『車街道』の中で出てくる言葉である。『実記』では、常阿上人が湯

の峯付近の山中で、道に迷った照手に出会い、

「入湯の人々にてましまさば、先ごなたに薬王山東光寺と号する寺あり。本尊は薬師如来にて、則湯の泡沫を用ひて作り立たる御仏なれば、先々此寺へ参謁あり、本尊に祈願して、其後湯もとに至らるべし。」と、湯の峰の案内まで懇に教へ、湯本を指してぞ急がれる。

という行動をしており、東光寺と「湯本」は別の場所であるように捉えられる。

しかし一方で、『実記』では「湯本」に胸に穴の開いた金仏の薬師があり、尊像の下から湯が出ているとしている。金仏の薬師は現在東光寺の本尊となっている、胸に穴があつて温泉成分が付着している薬師如来坐像のことであろう。<sup>(四)</sup>金仏の薬師に関する記述の部分だけ見ると、東光寺と「湯本」は同一の場所と捉えられ、常阿上人の発言とは位置関係が矛盾しているように考えられる。

また、『車街道』では「神といひ仏の誓ひ、本宮に湧出る湯は良薬も、及ばぬ人の病を治す。湯本の町は掛作り、字を並べて賑はへり。」と、湯の峯一帯の温泉街を示す言葉として「湯本」という言葉が使われている。

「湯本」という言葉は固有名詞ではなく、「温泉の湧き出るおもと。また、温泉が湧き出る土地、温泉場。地名となっているものが多い。」というような意味を持つごく一般的な言葉である。その上、『車塚由来』作成の上で参考にした可能性のある『実記』、『車街道』にも出てくる言葉でもある。「湯本屋栄七」の温泉宿は「湯本」の言葉の意味を踏まえたり、『実記』、『車街道』を参考にしたりして名付けられたのだと推測される。

## (二) 『車塚由来』の作成意図

他の小栗判官の物語に見られない『車塚由来』独自の特徴として、「車塚」に関するあらましの記述が大幅に増えていることが挙げられる。例えば「湯浴みして本復し、車を捨て帰る者多かりし」という記述は『車塚由来』で初めて見ることができる。

『車塚由来』作成の意図を考える上で注目すべき点は二つある。一つは「車塚」について、「後の世までも熊野権現の御利生、温泉の奇特を知らしめんがためなり」と作成の意図を述べていることである。そしてもう一つは、西尾市岩瀬文庫所蔵のものの本文末にある「依てこの塚へ詣でる人は一□<sup>下</sup>代足の患いする事なし」と「車塚」の御利益について記述があることである。

西尾市岩瀬文庫所蔵の「車塚由来」は、『縁起集』という合冊の資料の中に含まれているものであった。『車塚由来』は縁起という名を冠してはいないが、性質的にはかなり近いものであるように考えられる。

縁起とは、中世の寺社においてその起源や変遷と共に、その寺社が霊場であることを示す霊験譚や、霊験譚を証明するために用いられた霊跡、霊宝に関するあらましが記されたものである。

近世に入ると交通網が発展したこと、霊場信仰が栄えたことを背景に、巡礼に出る民衆が増えた。寺社は参拝者を呼び込むために、秘蔵であった縁起を簡略化、または新たに霊験を強調するような話を作成して略縁起を作って民衆に配布していたのである。<sup>(五)</sup>

「車塚」は寺社の霊跡ではないが、本文にもあるように「熊野権現の御利生、温泉の奇特」を知らしめるために作られたものであり、寺社の霊跡と極めて似た性格を持った史跡であると考えられる。中世に神明巫女(熊野比丘尼、念仏比丘尼)や時衆(時宗)、によって語られた、熊野の温泉による小栗判官復活譚を証明する史跡であるとも言えよう。また、近世に入ると巡礼の流行、新たに作られた小栗判官の物語の流行を背景に、湯の峯を訪れる人を増やすための名所として、「力石」、「まかずの稲」とともに『名所図会』に見られるような史跡へと整備されていったと考えられる。『車塚由来』は整備された「小栗判官史跡」の霊験と、世に知られた小栗判官の物語との関連性を、湯の峯を訪れた人に改めて強調するために作成されたものだと考える。

しかし、『車塚由来』作成者「湯本屋栄七」の意図が観光客を呼ぶためという程度であったとしても、『車塚由来』

自体は中世に熊野と関係のある宗教者たちが、小栗の物語の原型を作らなければ成立し得なかった史料である。『車塚由来』は作成された年代も作成者についても曖昧なものであるが、中世からの熊野信仰の延長線上に成り立った史料であるということは、最後に述べておきたい。

## 註

(一)湯の峯周辺の小栗判官史跡については、本宮町史編さん委員会『本宮町史 文化財編 古代中世史料編』(本宮町、二〇〇二年)、松原右樹『松原右樹遺稿 熊野の神々の風景』(松原右樹遺稿刊行会、二〇一二年)、安井理夫『ガイドブック小栗判官物語』(私家版、二〇一〇年)を参照。

(二)「安田家寄附特別図書の由来」(『大橋図書館四十年史』、坪谷善四郎、博文堂、一九四二年)

(三)本稿で別稿という場合、すべて「小栗判官伝承による史跡の成立」(二〇一五年度和歌山大学教育学部日本史ゼミ提出 卒業論文)をさす。

(四)『本宮町史 文化財編 古代中世史料編』(本宮町史編さん委員会、本宮町、二〇〇二年)

(五)「略縁起の流行」(『絵解きと縁起のフォークロア』、久野俊彦、森話社、二〇〇九年)